様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年 １０ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２４１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２８５５

研究課題名（和文）外国語指導でFormulaic Sequencesを暗唱させる学習効果の研究

研究課題名（英文）Research into the effectiveness of memorization of formulaic sequences in foreign language instruction

研究代表者
松崎　武志（Matsuzaki, Takeshi）

学校法人文京学院　文京学院大学・外国語学部・准教授

研究者番号：１０５８２３４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、CEFR-B1レベルの英語フレーズ（FSs）の中から日本の大学で学ぶ英語学習者が習得すべき60個を厳選し、各困難度を調べ、困難度の高いものと低いものを10個ずつ含んだ一続きのテキストを全文暗唱または部分暗唱させた場合、および例文を作成させた場合のFSs記憶定着を調べた。実験結果は、低困難度FSsの場合は「部分暗唱＋例文作成なし」が最も効率的であることを示唆し、高困難度FSsの場合は「暗唱なし＋例文作成あり」が最も効率的であることを示唆した。本研究はまた、暗唱、例文作成によるFSs学習への従事とその効果に影響を与える動機づけ要因についても調べ、計15カテゴリーの学習者内要因を特定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
外国語学習での暗記方略の是非がよく議論されるが、話は単純ではないことを本研究は示した。まず、暗記対象（英語フレーズ）の困難度が効果を左右することを示した。暗記の深度（テキスト全てを暗記するのか部分のみ暗記するのか）と他の学習方略（例文作成）の組み合わせにより異なる学習効果が生じることも本研究は示した。最後に、動機づけの要因は多数存在するので、学習者にとって最も大切なのはそれらの存在と相互作用を把握しておくことであること、そして、学術的意義については、学習方略の実証研究は少なくとも主要な動機づけ要因（たとえば価値と期待）も変数に含める必要があることを、本研究は示唆している。

研究成果の概要（英文）：This study first selected 60 English formulaic sequences (FSs) at the CEFR-B1 level to be acquired by learners of English attending Japanese universities, and investigated their differential difficulty levels. The study then assessed FS memorization when Japanese university English learners were instructed to recite, either in full or in part, two separate texts -- one containing 10 difficult FSs and the other 10 easy ones, both selected from the initial 60 phrases -- and when they were additionally tasked with creating example sentences. The experimental results suggest that for easy FSs, partial recitation without example sentence creation is the most efficient method, whereas for difficult FSs, no recitation but with example sentence creation is most effective. Moreover, this study explored the motivational factors that could influence learners' engagement in FS learning through recitation and example sentence creation, identifying 15 categories of internal learner factors.

研究分野：第二言語習得、動機づけ

キーワード：Formulaic Sequences　チャンク（フレーズ）　暗唱（暗記）　動機づけ（モチベーション）　外国語学習環境　英語　教室指導　学習

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は，外国語環境（目標言語の使用機会が限られている語学環境）における指導法（および学習法）のひとつとして Formulaic Sequences（FSs）暗唱効果の多様な可能性について調べることを目的として開始した。FSs とは，意味を成す一続きの言語情報を指し，中でも各構成要素と残りの要素との関係が比較的に固定化されており，かつ，連続体の一部を同一カテゴリーの別のものに置き換える際に比較的に制限のあるものを指す（例：*get rid of*）。長年に渡り FSs 現象は，応用言語学，コーパス言語学，外国語指導の大きな関心事であった。その理由は，言語使用のかなりの部分に FSs が含まれているのと，外国語学習者にとって FSs 習得が困難だからである。本研究の開始当初，FSs の指導法・学習法として暗唱にフォーカスを当てた研究報告が見られるようになってきていた。しかし，その報告数はまだ十分とは言えず，したがって，本研究は，先行研究が解明していなかった研究課題をいくつか設定した。

２．研究の目的

具体的には，次に挙げる問い 4 つを本研究の RQ（研究課題）とした。

RQ1: 日本の大学で学ぶ英語学習者に複数の FSs を含む一続きのテキストを全文暗唱または部分暗唱させることの間に，ターゲット FSs 記憶定着の差が見られるか。
RQ2: ターゲット FSs を含んだ例文を作成することを RQ1 の暗唱に付け足すと，ターゲット FSs は記憶定着しやすくなるか。
RQ3: ターゲット FSs に内在する困難度の違いは，RQ1 の暗唱と RQ2 の例文作成による記憶定着に影響をおよぼすか。
RQ4: どのような動機づけ要因が，暗唱および例文作成による FSs 学習への従事とその効果に影響を与えるか。

３．研究の方法

暗唱および例文作成による FSs 学習効果の検証で用いた学習ターゲット FSs の選出方法

Cambridge University Press が作成した The English Vocabulary Profile によって CEFR の B1 レベルに分類されている英語フレーズの中から大学生が身につけるべき 60 個を厳選し，それぞれ困難度を算出した。各フレーズの困難度算出方法については，調査対象としたフレーズの知識を問う受容と産出のテストを準備し，このテストを日本の大学に通う英語学習者 360 名に受けてもらい，テスト結果をラッシュ ・モデルを用いて分析した。この結果を踏まえ，本実験で用いる低困難度フレーズ 10 個と高困難度フレーズ 10 個を表１の通り選出した。

表１　本実験用に選出した B1 レベルの FSs

困難度	選出した FSs
高	*do badly/well, be supposed to do sth, go badly/well, etc., tired of doing sth, have been meaning to do sth, can afford, either way, not until, (just) in case, go wrong*
低	*up to 10, 20, etc., wait a minute, make sb do sth, in time, feel bad about sth/doing sth, get worse, miss a chance/opportunity, have sth in common, things like that, it/that depends,*

全文暗唱と部分暗唱の学習効果の違いを検証する実験で用いたテキスト

日本の大学に通う英語学習者にとって学習する意義があると見込まれるモノログを２セット用意した。片方のセットは表１で挙げた低困難度 FSs10 個を含めて作り（＝低困難度モノログ），もう片方のセットは表１の高困難度 FSs10 個を含めて作った（＝高困難度モノログ）。

暗唱と例文作成の学習効果を検証した実験の手順

1. 本実験の参加者（日本の大学に通う英語学習者 340 名）を，表２の通り，ターゲット FSs の困難度が高い場合と低い場合で各６つの群に分けた。
2. 参加者全員に上記のテスト（＝事前テスト）を受けてもらった。
3. 事前テストの実施から１ヶ月半程度が経ってから，全参加者に対して，高困難度モノログと低困難度モノログの両方を提示し，そして，日本語訳ヒントをもとに解く空所補充形式でターゲット FSs を認識してもらった。
4. 暗唱群には直ちに暗唱をしてもらい，全文暗唱群は全文暗唱できるようになったことを確認し，部分暗唱群は部分暗唱できるようになったことを確認した。合わせて，暗唱の有無に関わらず，各例文作成群には，ターゲット FS ごとに例文１つを直ちに作成してもらった。
5. 事前テストをもとに作成してあったターゲット FSs20 個のみの認識力と産出力を試す事後テストを参加者全員に受けてもらった。暗唱，例文作成による学習の継続的な効果を計測するべく，即時事後テストではなく遅延事後テストとした。

表２　本実験の群別参加者数

FSs 困難度	暗唱	例文作成	参加者数
高	全文暗唱	あり	57
		なし	54
	部分暗唱	あり	62
		なし	55
	なし	あり	52
		なし	60
低	全文暗唱	あり	55
		なし	52
	部分暗唱	あり	59
		なし	57
	なし	あり	57
		なし	60

暗唱および例文作成による FSs 学習への従事とその効果に影響をおよぼす動機づけ要因の検討方法

動機づけは複雑系であるため，還元主義にもとづく検証によって動機づけシステムを追究する試みには限界がある。したがって，本研究では，これまでに心理学で打ち立てられてきた動機づけのグランド・セオリーとミニセオリーで想定されている主要な構成概念，および既存のセオリーでは注目されていなかったものの動機づけメカニズムの要素として重要な役割を担っていると考えられる構成概念から成る動機づけの包括的モデルの構築を試みた。これにより，FSs 学習のための暗唱および例文作成への従事とその効果に影響をおよぼしうる動機づけ要因を探った。

４．研究成果

RQ1～3 について

低困難度 FSs の場合，実験結果は，本研究が調べた６通りの指導方法の中で「部分暗唱＋例文作成なし」が最も効率の良いやり方であることを示唆した。

一方，高困難度 FSs の場合，実験結果は，「暗唱なし＋例文作成なし」を除く残り５つのやり方すべてにある程度の学習効果が期待できることを示唆した。また，残り５パタンのうち，「部分暗唱＋例文作成なし」の効果が最も低そうだということも示唆した。そして，残り４パタンの中で要求される労力の最も少ない「暗唱なし＋例文作成あり」に残り３つのやり方と比べて変わらない学習効果が見られた。したがって，ターゲット FSs の学習に限定して結論を出すと，「暗唱はさせず例文を作成させるのが最良」ということになる。

もちろん，この結果には解釈の注意点がいくつかある。ここでは３つ挙げておく。第一に，全文暗唱は，時間のかかる作業であることは確かだが，ターゲット FSs のみならず暗唱テキストに含まれる全言語情報の統語や発音の能力向上に寄与することを期待できることを忘れてはならないだろう。第二に，例文作成について，例文をうまく作るためには，ある程度以上のターゲット言語運用力が要求される。第三に，ターゲット FSs の使用が必然でない場面でも用いられようになるかどうかについては，本実験は検証をできていない。

RQ4 について

暗唱および例文作成への従事とその効果に影響をおよぼしうる学習者内要因として，少なくとも次の 15 カテゴリーを特定した：(1) 欲求（いくつかある生理的欲求と心理的欲求），(2) パーソナリティ，(3) 特性興味，(4) ターゲット言語の知識，(5) 人生物語，(6) 自己概念（すなわち現実自己，自己価値，可能自己，理想自己，義務自己），(7) 期待（すなわち結果期待，効力期待，統制の所在），(8) 価値，(9) 知能観，(10) 自尊心，(11) 目標，(12) メタ認知，(13) 自動動機，(14) 作業記憶，(15) 感覚。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Takeshi Matsuzaki & Kevin Mark	４．巻 3
２．論文標題 Investigating the difficulties for university learners of English in Japan of CEFR B1-level phrases	５．発行年 2020年
３．雑誌名 CEFR Journal―Research and Practice	６．最初と最後の頁 59-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takeshi Matsuzaki	４．巻 535
２．論文標題 Teaching of multi-word expressions to second language learners	５．発行年 2018年
３．雑誌名 明治大学教養論集	６．最初と最後の頁 253-273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takeshi Matsuzaki	４．巻 535
２．論文標題 Formulaic language: its characteristics and how it is used and acquired	５．発行年 2018年
３．雑誌名 明治大学教養論集	６．最初と最後の頁 231-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kevin Mark	４．巻 --
２．論文標題 Implications for Language Learning and Teaching of “Psychological Comfort” in Relation to Complexity Theory	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Proceedings of the 10th International Conference on Language, Innovation, Culture & Education 2018	６．最初と最後の頁 39-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Kevin Mark	4．巻 539
2．論文標題 Materials Design for Less Teaching and More Learning	5．発行年 2018年
3．雑誌名 明治大学教養論集	6．最初と最後の頁 31-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松崎武志	4．巻 22
2．論文標題 実体験型学習と非実体験型学習	5．発行年 2023年
3．雑誌名 文京学院大学外国語学部紀要	6．最初と最後の頁 101-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松崎武志、諸井貴子	4．巻 23
2．論文標題 動機づけの包括的モデル	5．発行年 2023年
3．雑誌名 文京学院大学総合研究所紀要	6．最初と最後の頁 101-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　1件／うち国際学会　10件）

1．発表者名 Takeshi Matsuzaki
2．発表標題 Investigating the difficulties for university learners of English in Japan of CEFR B1-level phrases
3．学会等名 Hawaii International Conference on Education（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 Takeshi Matsuzaki
２．発表標題 Investigating actual difficulties of CEFR B1-level English phrases
３．学会等名 International Conference on Research in Teaching, Education & Learning（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kevin Mark
２．発表標題 Implications for Language Learning and Teaching of “Psychological Comfort” in Relation to Complexity Theory
３．学会等名 10th International Conference on Language, Innovation, Culture & Education 2018（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kevin Mark
２．発表標題 Cyclical Learner Corpus Development Integrated with Teaching and the Development of Materials and Tests
３．学会等名 The 57th JACET International Convention（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kevin Mark
２．発表標題 “MultiForm Scores”: software that addresses multi-word awareness, motivation, feedback and learner corpus development
３．学会等名 JALTCALL 2018, 25th Anniversary Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Takeshi Matsuzaki
２．発表標題 Effectiveness of dialog recitation in facilitating fluent speech production in foreign language contexts
３．学会等名 23rd International Conference on Teaching, Education & Learning（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kevin Mark
２．発表標題 Meaningful form-focused techniques for fluent processing and use of multi-word chunks
３．学会等名 7th International Conference on Language, Education and Innovation（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Takeshi Matsuzaki
２．発表標題 Effectiveness of dialog recitation in facilitating formulaic speech production
３．学会等名 KOTESOL International Conference（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Takeshi Matsuzaki
２．発表標題 Effectiveness of dialog recitation in facilitating fluent speech production by EFL learners
３．学会等名 Hawaii International Conference on Education（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Takeshi Matsuzaki
２．発表標題 A comprehensive model of motivation
３．学会等名 International conference on Management and Social Sciences（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	マーク　ケヴィン (Mark Kevin) (30409429)	明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員（客員研究員） (32682)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関